

日本移民学会にとっての「ポストコロニアル移民」研究
—その回顧と展望

蘭 信三(大和大学/上智大学)

1. はじめに—いま改めて「ポストコロニアル移民」研究を振り返ることとは

(1)2020年、在日コリアン、中国残留日本人/中国帰国者、台湾系華僑という若手研究者 3 名のスピーチ

➡「ポストコロニアル移民」のディアスポラ経験、サルタンとしての歴史を逆手にとって「生きられる歴史」

➡「帝国の膨張と崩壊の文脈に起因し、戦後のポストコロニアルな状況に規定された移民」への着目

歴史的過去の物語ではなく、現在につながるものとして研究することの必要性

*上記以外の戦後引揚者、中国朝鮮族、サハリン残留日本人・サハリン残留朝鮮人、韓国出稼朝鮮族

(2)新型コロナ禍での国民国家の前景化➡グローバル化で人の移動が「自然」となっていた状況への衝撃

➡国民国家の人の移動への強力な介入/規制を目の当たりにする日々

➡WWII 後の「民族強制移動」の想起=奇しくも、蘭・川喜田・松浦(2019)+加藤(2020)の引揚研究

(3)日本移民学会が中心となって展開してきた引揚研究や「ポストコロニアル移民」研究を振り返るとき

・日本移民学会=蓄積された移民研究+冷戦崩壊期の劇的な人の移動+植民地・移住民の記憶・想起

・高崎宗司ほか 1993『岩波講座 近代日本と植民地 5 膨張する帝国の人流』岩波書店。

*高崎(1993)は、二つの引揚研究(日本人の引揚+植民地出身者の引揚・帰国)の未掲載を反省!

2. 「帝国の膨張と崩壊」に伴う人の移動研究の展開

(1)忘却された「大日本帝国」、植民地、そして「移住民」

・敗戦・帝国崩壊➡「折りたたまれた帝国」(浅野豊美 2004)

・植民地の放棄と「植民地の忘却」(西川長夫 2007)……西川自身も満洲引揚者一・五世

(2)帝国の膨張と人の移動+戦時下の動員+帝国崩壊後の引揚げとそれに続く人の移動

3. 多様な共同研究の経験

a 蘭信三編 2000『中国帰国者の生活世界』行路社:1996 年からの共同研究活動成果・失敗?

➡中国帰国者の歴史背景を踏まえながらも、かれらの「いまの生活世界」・生活課題を対象化

*満洲移民研究は歴史学がホスト、中国帰国者研究は社会学や異文化間研究や日本語教育がホスト

b 京大での共同研究の訓練期間(1996~2008 年)

中久郎編 2004『戦後日本の中の「戦争」』世界思想社での事務局担当・京大社会学教室の共同研究班

山本有造編 2007『満洲 記憶と歴史』京都大学学術出版会、山本・西村・蘭の混合研究班

c「オーラルヒストリーの会」の事務局:2003~2008、竹沢泰子・松田素二・落合恵美子・岡真理・やまだようこ・西成彦・鯉坂学などと京都の中堅と一緒に活動。オーラルヒストリー実践とその方法論への貢献。

d 満蒙開拓を語りつぐ会:2003年より長野県飯田市で市民の満洲引揚者への聞きとりという歴史実践、聞きとりという方法による地域における市民による歴史実践との協同、ある種の社会貢献。

➡『下伊那のなかの満洲 聞き書き集 1~10 集』の刊行

4. 転機としての 2005 年日本移民学会ワークショップ

(1)日本移民学会ワークショップと共同研究の本格化

・2005 年度日本移民学会ワークショップの開催:竹沢さんとのやり取りがきっかけ

2006 年 3 月 25 日 26 日「日本帝国をめぐる人の移動の諸相」

朝鮮、満洲、樺太、台湾、南洋に関する 14 の報告、二日間こわたる大会→大盛況!

➡蘭編著 2008『日本帝国をめぐる人の移動に関する国際社会学』不二出版へ

(2)二国間「人の移動」研究から「帝国をめぐる人の移動」研究へ、一国史から帝国史へと転換

・朝鮮⇔日本、満洲⇔日本、台湾⇔日本という二国間から、朝鮮⇔満洲+朝鮮⇔内地といった帝国圏例)朝鮮→内地→樺太(→北海道へ)、沖縄→本土→沖縄→台湾→沖縄→南洋等々。

*海外移民研究 vs 帝国の膨張と人の移動研究、二項対立から相互連関を意識した研究への転換

・このワークショップで知り合った外村大や松田ヒロ子等若手との共同研究の本格化・混成研究班

研究目的:20 世紀東アジアにおける人の移動研究「総体」を明らかとしたい

*個人的にもこの研究会は大きな転機、満洲引揚者研究から「帝国と人の移動」研究へ

* *それぞれが変わった研究と見なされていたが、皆が集まるとその関心が響き合う会でした!

➡蘭編著 2013『帝国以後の人の移動』勉誠出版へ

(3)2011 年、川喜田敦子との出会いによってドイツ人の追放と日本の引揚の比較の共同研究へ

蘭・川喜田・松浦(2019)『引揚・追放・残留 戦後国際民族移動の比較研究』名古屋大学出版会。

5. 引揚研究、「帝国と人の移動」研究の展開

(1)引揚研究とは

・第二次世界大戦後の連合国による戦後政策としてのドイツ人の「追放」、日本人の「引揚」

・引揚研究の各フェーズ

1)引揚前史、2)引揚政策、3)引揚者の戦後史、4)植民地・引揚の記憶

・引揚者とは誰か

日本人、「琉球人」、朝鮮人・台湾人といった植民地出身者

・引揚(追放)、帰還/帰国、残留/定住

*国内追放政策としての在日朝鮮人➡北朝鮮帰国事業

・残留研究の展開

・引揚者の階層、年代、ジェンダー、民族、居住地・引揚先による多様性

(2)「二つの引揚研究」の展開

*日本人の引揚、植民地出身者の引揚(帰還/帰国)、残留、「密航」、帰国事業

6. 「ポストコロニアル移民」研究は現代の課題に貢献できるか？

- (1) 在日コリアン研究の展開－歴史学的研究、社会学的研究
- (2) 中国在留日本人研究、サハリン残留日本人研究、サハリン残留朝鮮人研究等
- (3) 引揚研究、「ポストコロニアル移民」のアカデミックな貢献
 - ・戦後の民族強制移動政策と民族マイノリティ問題、そして難民問題との接続
 - ・colonial settler という視点の注目によって植民と移民、難民研究との接続
 - ・個々のポストコロニアルな状況による規定＝帝國的文脈＋帝国崩壊後の文脈
 - ➡ホスト社会におけるポジショナリティ＝両国関係による規定
 - ➡アイデンティティ・ポリティクスの状況
 - ・移民的マイノリティ研究への深い考察を呈示する
 - ➡多様な移民マイノリティ研究への視点を提供する
 - ・東アジアの相互の関係性を映し出す存在としての「ポストコロニアル移民」
 - ・連関する東アジアの「ポストコロニアル移民」
- (4) 若い「ポストコロニアル移民」にとっての研究の意義
 - ・自分と家族の個人史の背景、歴史的な文脈による理解
 - ・アイデンティティ・ポリティクスとアイデンティティ問題へのヒント

【参考文献リスト】

(a) 帝国の膨張と人の移動研究

- ・森田芳夫 1964『朝鮮終戦の記録－米ソ両軍の進駐と日本人の引揚』叢南堂書店。
- ・森田芳夫・長田かな子編 1979・1980『朝鮮終戦の記録 資料編 第1巻・第2巻・第3巻』叢南堂書店。
- ・木村健二 1989『在朝鮮日本人の社会史』未来社。
- ・若槻泰雄 1991『戦後引揚の記録』時事通信社。
- ・山室信一 1993『キメラ－「満洲国」の肖像』中公新書。
- ・蘭信三 1994『「満州移民」の歴史社会学』行路社。
- ・山本有造編 1995『「満洲国」の研究』緑陰書房。
- ・西成田豊 1997『在日朝鮮人の「世界」と「帝国」国家』東京大学出版会。
- ・柳沢遊 1999『日本人の植民地経験 大連日本人商工業者の歴史』青木書店。
- ・松本俊郎 2000『「満洲国」から新中国へ－鞍山鉄鋼業からみた中国東北の再編過程』名古屋大学出版会。

(b) 引揚げとそれに続く人の移動研究

- ・蘭信三 1994『「満州移民」の歴史社会学』行路社。
 - ➡満州引揚者 1984・中国残留婦人 1987 の出会い＝「いま・ここ」から振り返る「正面の歴史」
- ・坂部晶子 2008『満洲経験の社会学』世界思想社。
- ・菊池嘉晃 2009『北朝鮮帰国事業－「壮大な拉致」か「追放」か』中公新書。

- ・李海燕 2009『戦後の「満州」と朝鮮人社会—越境・周縁・アイデンティティ』御茶の水書房。
- ・権香淑 2011(2019 増補版)『移動する朝鮮族—エスニック・マイノリティの自己統治』彩流社。
- ・蘭編著 2013『帝国以後の人の移動二つの祖国』晩誠出版。
- ・東栄一郎(飯野正子ほか訳)2014『日系アメリカ移民 二つの帝国のはざままで』明石書店。
- ・安岡健一 2014『他者たちの農業史 在日朝鮮人・疎開者・開拓農民・海外移民』京都大学学術出版会。
- ・中山大将2014『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成』京都大学学術出版会。
- ・李淵植(館野哲訳)2015『朝鮮引揚と日本人—加害と被害の記憶を超えて』明石書店。
- ・今泉裕美子・柳原遊・木村健二編 2016『日本帝国崩壊期「引揚げ」の比較研究—国際関係と地域の視点から』日本経済評論社。*宮本正明「在日朝鮮人の帰国——1945～46年を中心として」**補論
- ・森垂紀子 2016『複数の旋律を聞く:沖縄・南洋群島に生きた人びとの声と生』新月舎。
- ・森垂紀子 2017『はじまりの光景:日本統治下南洋群島に暮らした沖縄移民の語りから』新月舎。
- ・鈴木久美 2017『在日朝鮮人の「帰国」政策 1945年-1946年』緑陰書房。
- ・柳沢遊・倉沢愛子編 2017『日本帝国の崩壊 人の移動と地域社会の変動』慶應義塾大学出版会。
- ・朴敬珉2018『朝鮮引揚と日韓外交正常化交渉への道』慶應義塾大学出版会。
*本書は日韓交渉における朝鮮引揚者の役割を掘り上げた本
- ・蘭・川喜田・松浦 2019『引揚・追放・残留 戦後国際民族移動の比較研究』名古屋大学出版会。
- ・李盛煥・木村健二・宮本正明編『近代朝鮮の境界を越えた人びと』日本経済評論社。
- ・菊池嘉晃2020『北朝鮮帰国事業の研究—冷戦下の「移民的帰還」と日朝・日韓関係』明石書店。
- ・加藤聖文 2020『海外引揚の研究 忘却された「大日本帝国」』岩波書店。
- ・松田ヒロ子 2021『沖縄の植民地的近代 台湾へ渡った人びとの帝国主義的キャリア』世界思想社。

(c) 「ポストコロニアル移民」研究

(1) 在日コリアン研究の展開—歴史学的研究、社会学的研究

- ・金太基1997『戦後日本政治と在日朝鮮人問題 SCAP の对在日朝鮮人政策』勁草書房。
- ・外村大 2004『在日朝鮮人社会の歴史学的形成—形成・構造・変容』緑陰書房。
- ・水野直樹・文京洙 2015『在日朝鮮人 歴史と現在』岩波新書。
- ・外村大 2012『朝鮮人強制連行』岩波新書。
- ・金時鐘 2015『朝鮮と日本に生きる—済州島から猪飼野へ』岩波新書。

(社会学系の研究)

- ・福岡安則 1993『在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ』中公新書。
- ・金泰泳 1999『アイデンティティ・ポリティクスを超えて 在日朝鮮人のエスニシティ』世界思想社。
- ・李洪章 2016『在日朝鮮人という民族経験 個に立脚した共同性の再考へ』生活書院。
- ・朴沙羅2017『外国人をつくりだす』ナカニシヤ出版。
- ・李里花 2021『朝鮮籍とは何か トランスナショナルの視点から』明石書店。